

◆連載-Vol.31

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948年神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年～2014年千葉大学客員教授。

モダニズムの向こうへ その5

林昌二 都市におけるオフィスビルのあり方を探る

オフィスビル設計のリーダー的役割を果たしたのが林昌二だろう。

彼が東京工業大学卒業以来、最後まで所属していたのが日建設計。日建設計の元をたどれば1900年創業の住友本店臨時建築部に行き着く。戦後の1950年に独立して日建設計工務となり、建築設計監理を業務とする設計事務所となった。

2000年には日建設計創立50周年を記念して『近代建築』でも特集を組み、その企画と一部の執筆に携わったが、それからすでに17年も経ってしまった。いやはや月日が経つのは早い、などと黄昏れてはいけな。

臨時建築部の頃から数えれば100年。その間、10年ごとに代表的な建物を選び、それぞれに評者を付けて論評しよう、という趣旨で特集企画を立て、古谷誠章、隈研吾など、いまでは日本建築学会長と世界的に名を馳せている大御所の方々に原稿をお願いした。なかなか評者が決まらなかったのが「伊予銀行」だったので、行きがかり上、私が引き受けることとなった。

ここで詳しく繰り返すこともないが、銀行の営繕の方が建物を大切に扱っており、可能な限りオリジナルの状態を保つことに心を砕いている、という内容だった。この特集号を読んだ林が「実はまだ伊予銀行に行ったことがないんです。いい話を聞きました。ぜひこれから見に行きます」と言ってくれたのは、林の真摯さの表れだろう。

林の作品譜を並べたら膨大なものになるだろうから、ここでは割愛し、初期の私が気になった建物と竣工年、そしてそのときの林の年齢を並べてみよう。

「三愛ドリームセンター」(1963) 35歳。

「パレスサイドビル」(1966) 38歳。

「ポーラ五反田ビル」(1971、日本建築学会賞受賞) 42歳。

「三愛ドリームセンター」はまさに世界のギンザ四丁目交差点の角に位置している。これ以上ないというシンボリックな敷地に、全体がシリンダー状で塔部をサインとした、これもシンボリックなデザイン。筋向かいの戦災にも耐えた「服部時計店」(渡辺仁、1932)のネオルネッサンス風なデザインとの対比もあり、小さいながら今でも異彩を放っている。

「三愛ドリームセンター」が建てられた頃、すぐ近くの数寄屋橋にあった、やはり渡辺仁の設計による「日劇」(1933)は、冠のように「東芝」のネオンが瞬き、銀座四丁目と数寄屋橋交差点との間のビルの屋上には森永製菓の地球儀のようなネオンが光っていた。また日劇の隣には石本喜久治が設計した「朝日新聞社」(1927)など、今から言えばレトロな建物が建ち並ぶ中に、林はガラスのシリンダーを置いたのだ。

今のように世界的な有名ブランドが競い合う派手なファサードデザインなど見当たらず、様式建築から当たり前の四角い箱へと変貌する銀座であり、変化し続ける街並みの中に確実に存在した時間の流れを、林は読み込んで形にしたというのうがち過ぎだろうか。

林の代表作ともいえる「パレスサイドビル」は、アントニン・レイモンドの「リーダーズ・ダイジェスト東京支社」(1951)の跡地に計画された。リーダーズダイジェストは竣工後13年で解体され、加速する東京都心部開発の、いわば生け贄になったようなものであった。この設計を機に、林は都市環境の変化と建築のあり方について正面から考えるようになった。

学生時代、見学会に参加したときに、エントランスの上に掛った傘の骨のようなキャノピーの下で林が説明してくれた。今でも鮮明に覚えているのは、キャノピーが許可にならなかったのも、「傘のようにすぼめられるようにする」と言うことだった。当時も半信半疑だったが、それは今でも信じられない。林得意のシニカルな表現だったのかもしれない。

以上は余談だが、機能とデザイン、施工性、さらにはライフサイクルへの対応などが見事に一体化しているのがパレスサイドビルだ。日除けと外装メンテナンスの足場を兼ねたグレーチングと縦樋は階ごとにユニット化されて交換も容易。オフィス部分とコアとは矩形と円柱の、ガラス張りとの対比であり、性格に違いを際立たせている。

日本建築学会作品賞を受賞した「ポーラ五反田ビル」は、オフィスビルとしては小ぶりなシンプルだが、両端にコアを配したダブルコア形式の代表作と言ってもいいだろう。

何よりも注目したのは、アプローチ側の道路の先にあるJR山手線の土手を利用したランドスケープである。建物の周囲はドライエリアで囲まれており、1階ホールは2面がガラス張りで道路から敷地の奥までが見通せる。

林は奥の庭に勾配を持たせてツツジを植えた。反対側の山手線の土手にも同じ植栽を施した。したがってホールに建つと前後をツツジの斜面で挟まれた、五反田の猥雑な風景を忘

れさせてくれる空間が創出された。

ここで林はひとつの建物の空間領域を、敷地を越えて拡大したのである。そこはツツジが支配する空間で、四季折々に表情を変化させる。巨大都市にあっても自然の変化を実感できる場を提供したのである。

これらはいずれもひとつの建物が都市に置かれたとき、どのような意味を持ち得るかという問いに対する答えであったように思う。「三愛ドリームセンター」は都市における象徴性と継続性であり、「パレスサイドビル」は更新され続ける都市景観への対応手法であり、「ポーラ五反田ビル」は大都市と建物に自然を買入させた。

その後も林は数多くのオフィスビルの設計に携わった。日本におけるオフィスビルの歴史を綴ったといってもいい。すべてに触れるためには1冊の書籍では到底不可能であろう。しかし、そんな林も自邸を雅子と一緒に設計している。「私たちの家Ⅱ」がそれだし、その前に同じ敷地に「私たちの家」(1955)を、これもふたりで設計している。独断で言えば、どこか清家清を彷彿とさせる雰囲気があった(もちろん、図面からの想像でしかない)。

「私たちの家Ⅱ」を林の案内で訪れたとき、巨大なオフィスビルを設計しながら、ここまで繊細なディテールを描くことに驚きを隠せなかったが、それ以上に興味を惹かれたことがあった。

それはソーラーパネルを設置するための架台が用意されて

いたにもかかわらず、時期尚早として載せなかったこと。そしてほぼ同じ時期に西澤文隆も自宅を設計してソーラーパネルの架台を設けながら同じ理由で載せなかった。東西の両巨頭がふたり揃って、まだ性能が不十分だし経年変化が見えないという理由でソーラーパネルを拒否したことであった。いまや住宅の屋根の上だけではなく、耕作放棄地や山間部にもソーラーパネルが光り輝いている。彼らがこんな風景を見たらなんと言うであろうか。

余談を追加。ある時林に、「私は無柱空間より柱があったほうがいい。上役の目から隠れられるから」と言ったら、例の皮肉交じりのような笑顔で「なるほど」と一言。

またある時、クライアントのことをなぜ施主というのか、その理由を話してくれた。「公共建築を発注するのは行政ですが、建設費は住民の税金なんです。税金はいわば浄財のようなものですからお布施です。だから住民がお施主さんなんです。私たちはお施主さんのために仕事をしなければなりません」。公共建築設計者心得。なるほど。

ついでにもうひとつ。雑誌の誌面がモノクロ写真主体からカラー主体に変わったころ、写真を見ながら設計スタッフたちと話をしているところを林が通りかかり、「皆さん、写真はモノクロです。空間構成がよくわかります。色仕掛けに騙されてはいけませんよ」。確かに華やかに彩色された空家をモノクロで見ると、何か足りないと感じることがある。これも、なるほどである。

(続く)



三愛ドリームセンター (1963)



パレスサイドビル (1966)

ポーラ五反田ビル (1971)
出典 (3点): ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)